

本研究は、東京帝国大学の前進とされる江戸末期の洋書調所(再版は開成所)から刊行された『英和对訳袖珍辞書(A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language)』について、現存する洋装本を手がかりに、製本構造の綴じの分析を行うものである。『英和对訳袖珍辞書』は、文久2年(1862年)に堀達之助を編集主任として刊行された日本で初めての本格的な英和辞典として知られている。実際の仕上がりは厚手の大きな辞典となったものの、「袖珍」は手軽に参照して持ち運びができるというPocketの和訳に対応している。英学、蘭学、国語学、言語学、歴史学をはじめとする多様な先行研究によって、江戸末期から明治の西欧文化の移入期における文法や訳語の問題等が詳細に分析されてきており、辞書の編纂はH. Picardの著した英蘭辞典を底本としてオランダ語を和訳する方法で進められたことが指摘されてきた。初版の発行部数は200部あまりと推定されているが、英和辞書の需要が多く読者の人気が高かったため、その後も慶応2年(1866年)の再版第一刷、翌年の第二刷、明治2年(1869年)刊行の第三刷と改正増補版が続けて出版された。

2013年現在、『袖珍辞書』初版については刊行数の1割にあたる15冊から20冊が、国内外の公共図書館、大学図書館、資料館、個人蔵にて現存することが確認されている。これらの製本に関する書誌情報に関しては先行する言語学や歴史学の研究においても指摘がなされているが、所蔵館の大半で歴史的な貴重書あるいは準貴重書(恵那市では有形文化財)として保管されているものの、いずれも装幀はばらつきがある状態で発見されてきた。表紙デザインや見返しの素材が異なり、製本が一定のパターンに集約されないことは、後年の年月における修復によるのではないかとすることも指摘されている。本研究では、先行研究で明らかにされてきた歴史的考察と分析を踏まえながら、表紙や見返しという外観ばかりではなく、製本内部の綴じの構造と本づくりの工程に着眼し、文化的記憶を伝える辞書の原装幀の姿を浮かび上がらせることを目標とする。

本研究の分析手法を支えているのは、製本を物理的に完成した物として捉えるのではなく、いわば歴史の長い時間を生きてきた有機体として、そして今後も記憶を伝え、劣化していく可能性をもった文化的継承の可変体として、読者との関係性において本のかたちを捉え直そうとする視点である。既に『袖珍辞書』初版の刊行から150年あまりの年月が経過しているが、後世の人びとによって修復が繰り返し行われている場合においても、かつての職人の手仕事(あるいは修復者の作業)を再構成し、装幀に用いられた重層的な素材を紐解くことで、読者が手にしたさまざまな製本の姿を浮かび上がらせることが可能なのではないかと考える。

本発表では、大英図書館の所蔵する『英和对訳袖珍辞書』2冊の製本、すなわち初版および再版の綴じに関する調査について報告を行い、さらに日本国内の大学図書館などに現存する初版および再版の製本構造との比較検証を行うことで、製本の中に流れてきた歴史的な時間の経過と変化を明らかにする。まず一点目に、江戸末期における本の洋装化がいかに製本職人の手作業にとって試行錯誤を要するものだったかを検証し、日本における綴じの文化的変容の一端を分析することを目標とする。さらに二点目に発展的な考察として、ヨーロッパ製本史において製本構造がどのような意味を持つのか、その位置づけを検討することを課題とする。大英図書館所蔵の初版『袖珍辞書』は、幕府瓦解に伴う留学生の売り払い本とされてきており、英字筆記体の蔵書記署名から外山正一氏の旧蔵本であることが分析されてきた(遠藤、堀、1999年)。発表者の今回の調査では、新たに製本構造の内部に「捨八」の署名を確認し、製本された時期を検証するための材料となると同時に、先行研究を補強するものと考えられる。